

昭和38年度平城宮発掘調査概報

歴 史 研 究 室
建 造 物 研 究 室

昭和38年度におこなった特別史跡「平城宮跡」の発掘調査は、第12、13、14、15、16次の5回にわたり、発掘総面積は211アールにおよんだ。第12次調査は、7月9日から9月26日まで、発掘調査事務所の西南方、第二次内裏中心部（6AAQ-C・D地区）にあたる20アールを発掘した。第13次調査は、8月2日から10月9日まで、通称一条通北側佐紀町南部（6AAO-F・H・I・K・V地区、6AAO-C・D地区および6AAB-U地区）の50アールを発掘した。第14次調査は、宮城山西端（6ADH-F・I・J・K・L地区）55アールを12月7日から3月31日まで、第15次調査は、西面南門の周辺（6ADE-I・R・P地区）46アールを2月21日から3月31日まで発掘調査した。以下、調査結果の概要を報告する。

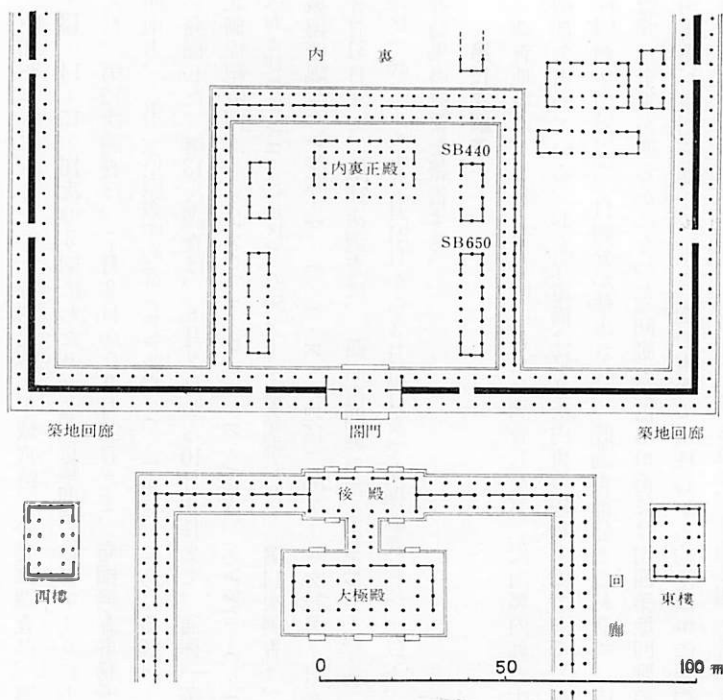
第12次調査

調査地域は、これまで3回にわたり調査した第二次内裏内郭の中央南部を占めている。おもな遺構は第2次内裏の建物と廊である。掘立柱回廊のSC24は、11間分が検出され、既調査部分と合わせて、内側22間の全貌が明らかになった。回廊の約3.7m南には南面築地回廊の北雨落溝が東西に通っている。廊の東西には柱心から約2.1mに幅約40cmの素掘の雨落溝がある。この廊の西5.9mで、9間2間（柱間2.9m

等間）の南北棟掘立柱建物SB650を発見した。この建物は第6次調査で発見したSB440と8.88mを置いて桁行柱列をそろえて南北に並んでいる。南面築地回廊の北雨落溝は内裏中軸線から東へ約43m発掘したが、残存状況は極めて悪く、SC24の接合部付近に溝石が残存する程度であった。しかし、凝灰岩の散乱する雨落溝の痕跡は中軸線付近でも一直線に通っており、内裏南面築地回廊の基壇は



第1図 第6・9・12次調査地域



第2図 内裏大極殿一郭復原図

閤門の位置でも張出しはなく、閤門の幅は築地回廊の幅と一致していると考えられる。

第二次内裏に属する建物を平安宮内裏と比較すると、SB440・650は宣陽殿、春興殿にあたるものだが、桁行が宣陽殿9間、春興殿が7間であるのに対し、SB440が6間、SB650が6間となっている。第

2次内裏以外の遺構として欄が2列ある。

第13次調査

第13次調査は、東地区(6AAB-U区、6AAO-E・D区)と西地区(6AAO-F・H・I・K・V区)にそれぞれ行った。

△東地区▽

主な遺構は、建物11棟、築地1面、井戸1箇所、溝2条、土境2箇所である。建物のほとんどは掘立柱のものであるが、SB876の小建物は小礎石をすえたものである。6AAB-U地区一帯は地面が東に傾斜して下り、それを埋めて造営が行なわれていた。遺構は配置状況や柱穴の重複関係から少くとも次の5期に区分しうる。

A期 6AAB-U地区中央北辺で、東西棟桁行7間(柱間3m)建物SB795の一部を検出したのみである。

B期 建物3棟、築地1面が整然と配置されている。U地区の東北部に、南北棟6間以上×4間(柱間各3m)東西両廂付建物SB790がある。この建物の東側柱列の南延長線上に東妻をおいて、東西棟桁行7間(柱間2.6m)の建物SB710(梁間未確認)がある。その約6.5m西に東西棟3間×2間(柱間各2.4m)の建物SB808がある。この南側柱列とSB710の北側柱列とは同一線上にある。U地区東端には築地SC705が南北に通っており、築地の東側は一段低くなっている。築地は築地層を約50cm掘りさげ、その上に黄褐色粘土を積み上げた基礎地固めを残すのみで、東縁は水田造成時に破壊され、現存の築地基礎地固めの最大幅は6mである。U地区西北隅の土境のK820はこの期に属し、出土した木簡から埋没時を天平末年に推定できる。

C期 SK820埋土上に造営された南北棟6間×3間(柱間各3m)

東廂付建物SB818と、その南10mに西側柱列をそろえて、南北棟2間以上×2間（柱間各3m）の建物SB805がある。この建物には床東柱穴がある。9AAO—D地区の北部にある3間×2間（柱間各3m）SB875の期のものであろう。

D期 U地区の中央部西より東西棟5間×3間（柱間各4m）北廂付建物SB775がある。

E期 U地区の中央北より東西棟6間×4間（柱間各4m）四面廂付建物SB780がある。井戸SE715の期の属する。

以上の5期のほかに時期を決しがたい建物が数棟ある。なお、D地区のほぼ全域は市庭古墳（SX300）の前方部東側の周濠部分にあたり一部にトレンチを入れて玉石を敷きつめた外堤東岸を検出した。

△西地区V

今回新たに検出した主な遺構は、建物11棟、冊1列、井戸1個所などで、第2次内裏北面築地回廊SC060、その北の築地SC488などの東延長部も前年度にひきつづき検出した。この地区の南半は市庭古墳前方部前面の周濠にあたり、平城宮造営時に埋没し、その上に建物を造営している。新たに検出された建物はすべて掘立柱のもので、配置状況や柱穴の重複関係から次の6期に区分しうる。

a期 F地区とK地区にまたがった南北棟5間×2間（柱間各4m）の建物SB1080がある。他に遺構はない。

b期 K地区の中央部にある東西棟5間以上×5間（柱間各3m）の建物SB1000は身舎の梁行が3間のもので、西端は未調査だがおそらく四面廂になるものとみられ、6AAO区で最大の規模のものであ

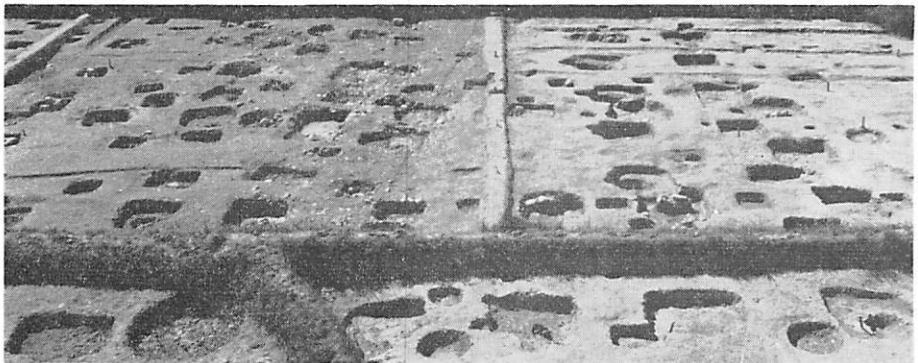
る。その6.5m北にある東西棟5間×4間（柱間桁行各2.1m、梁行各1.5m）南北廂付建物SB1085の期のものかもしれない。

c期 K地区の東部に南北棟11間×2間（柱間桁行各2.88m、梁行各3m）の建物SB960がある。

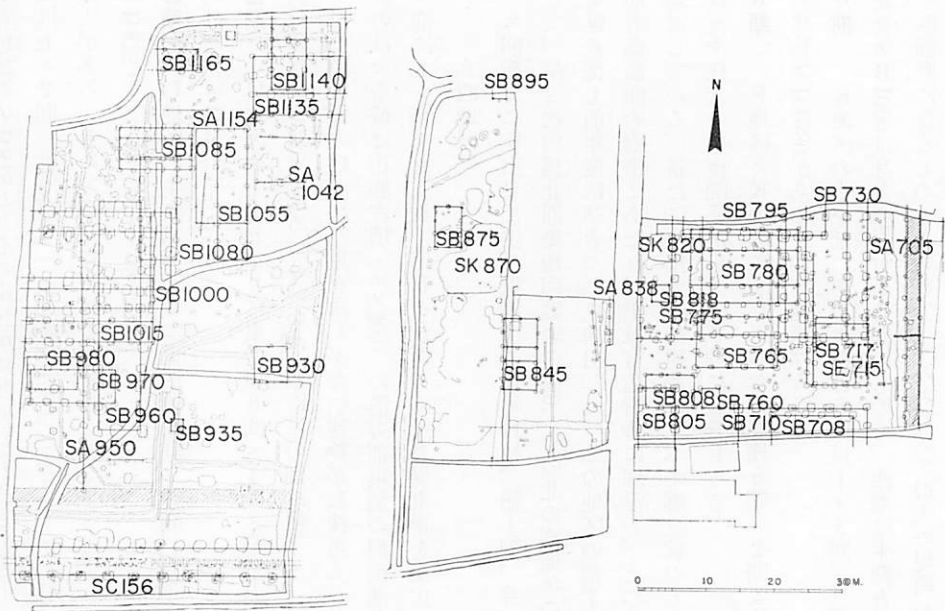
d期 東西棟5間×2間（柱間桁行2.4m、梁行2.7m）建物SB790はこの期に属する。

e期 SB1000南半に重なる東西棟6間以上×3間（柱間桁行各3m、梁行各2.85m）南廂付建物SB1015がある。

f期 F地区のほぼ中央で、南北棟7間×2間（柱間各2.4m）建物SB1065を検出した。この建物の北第



第3図 SB1000 付近遺構状況



第4図 第13次調査地域実測図

6柱列の中央より小柱穴があり、間仕切りがあつたものと思われる。この間仕切りまでの5間の部分には、西に3m離れて小柱穴が並び、西廂、日隠などの存在も考えられる。このSB1055の北2mに東西棟4間以上×3間(柱間各3.85m)南廂付建物SB1135がある。桁行梁行ともに2間の建物SB830と南北柵SA950がこの期のものである。この期の遺構は方位が北で西にふれる傾向がある。

第13次調査地域はいずれも第2次内裏内郭の北に位置し、第10・11次調査地域とともに内裏に付属する部分でおそらく平安宮の華芳坊・桂芳坊の前身的な地区と推定される。東端で検出された築地SC705は現地形からみて、第2次内裏外郭の東面築地とみられる。

発見された遺物で最も著しいものは、東地区のSK830から出土した年代の推定される一括遺物である。この土壌は方約4m、深さ2.3mで、底に厚さ8cmの遺物の堆積があつた。この堆積には本年報で別に述べた1866点の木簡とともに、多量の土器類、木器類、繊維製品、瓦類、自然遺物などがあつた。この土壌は、おそらく短期間のごみ捨て穴らしく、埋没の年時は木簡の年号記載から天平19年8月をあまりへだたらないと推定される。土器類は土師器、須恵器が主で、三彩釉小形薬壺蓋が一点ある。土師器、須恵器には墨書のあるものが十数点あり、土馬が一点出土している。木製品には糸巻、紡錘車、火鑽臼、杓子、箸、曲物容器、漆器片や人形、桧扇など、繊維製品には平絹断片、麻縄があり、さらには、蓆や籠の断片、桧皮なども検出されている。自然遺物には栗、胡桃、桃、瓜などの種子類、木の枝や葉があつた。同じく木簡の出土をみたSK870は東西・南北ともに5mほどの



第5図 櫛 扇

不整形なもので深さは1.5mと浅く、遺物保存状況は良くなかったが、土器・瓦類のほかに漆冠断片、蒨片などを検出した。この土壙付近の整地層中から、緑釉平瓦片が1枚分出土している。その他の地点からは、多量の瓦・土器類が出土しているが、U地区検出の数点の円硯、鳥形硯、八花縁宝珠硯類や墨書土器が注意される。

第14次・第15次調査

第14次調査は宮跡西南隅の6A・D区で行なった。主な遺構は宮城の南を限る大垣のほかに掘立柱建物5棟、柵2列、井戸2箇所がある。大垣は、南縁が現在の水路で破壊されて不明だが、幅8.5m以上、深さ1.5mの基礎地固めをおこない、その上に幅約3.5mの基礎部の築地と北側に約1.5m幅の犬走り部を設けている。築地は削平されていた。この築地の中心から15m南に隙があるが北縁を調査するにとどまった。

調査地域の西北部で、側板を立て、内側から枠とめた方形の井戸を検出した。側板は、各面二枚、上下二段、計16枚からなり、すべて木製の桶を転用したものであつた。木製桶は、下段8枚に用いたものが保存良好でほぼ完形に近く、頂部を山形に作つた長方形の材で、長さ100cm、幅54cm、厚さ3cm、表面中央に鐫がある。表面には、上下に鋸歯文、中央に逆S字形の文様を、黒、丹、白の三色で書いていゝる。上端木口部には、斜めに裏面まで貫通する小孔がほぼ3cm間隔に穿たれている。中央には上下約20cmを置いて2個ずつ小方孔が穿たれており、保持装置をとめる孔とみられる。この桶の寸法・文様・彩色は、延喜集人司式に記載のある隼人の威儀用の桶と合致している。上端の小孔は馬髪を編著するためのものであろう。裏面に文字・絵画の墨書・線刻をもつものがある。なお、縦に二枚に割れたものを横棧を打ちつけて再使用したらしく、裏面には棧をとめる溝がえぐつてある。この地域の下層には弥生式時代の集落跡があつた。検出された住居跡は18箇所、他に数条の溝や壺棺を埋葬した土壙二箇所などがある。第15次調査は第14次調査地域北方の9A・D区で行ない、西面南門とそれに連なる大垣および建物2棟と柵1列を発見した。西面南門は西半部が現在の道路下になり調査不能だったが、調査した東半部では基壇は削平されており、わずかに地下に掘り込んだ基礎地固めが残存していた。その範囲は南北約32mで、大垣が門の中央にとりつくとい定すると東西はおよそ14mとなる。建物は2時期にわたる各1棟で、いずれも門の北約15mの東西柵の北側にあつた。なお、この地区の北半は中世の秋篠川の氾濫で破壊されていた。(本村豪章・鈴木 充)